

それでも
人生に
イエスと
言う
『フランクフルト「夜と霧」への旅』を読む

2013.6.7 fri.
17:00 - 19:30
西南学院大学チャペルにて
対象は学生・教職員・一般市民の方
事前申し込み不要・無料

講演 「『夜と霧』と私」

講師：河原 理子 『フランクフルト「夜と霧」への旅』著者
コメント：ジョナサン・マゴネット レオ・ベック大学（英国）前学長 名誉教授

座談会 「フランクフルトとの対話」

河原 理子 『フランクフルト「夜と霧」への旅』著者
青野 太潮 西南学院大学・新約聖書学
平井 佐和子 西南学院大学・刑事法学



講師：河原 理子 かわはら・みちこ 朝日新聞編集委員

1961年東京都生まれ。東京大学文学部社会心理学科を卒業し、朝日新聞記者に。AERA 副編集長、文化部次長などを務める。90年代に、社会部で戦後50年企画などを担当し、性暴力被害の取材をきっかけに、事件事故の被害者の話を聞くようになる。著書に『犯罪被害者 いま人権を考える』（平凡社新書、1999）、『<犯罪被害者>が報道を変える』（高橋シズエ・河原理子共編、岩波書店、2005）。

「豊かな時代においても「実存的空虚」は消えない。生きる意味を捉えかねる私たちに、フランクフルトは答える。「人間が人生の意味は何かと問う前に、人生のほう人間に問いを発してきている」。意味は自ら見出さねばならない。すべてを奪われてもなお「個の態度」という価値がある。「それでも人生にイエスと言う」と。

著者にとってフランクフルトへの旅は、自身への旅でもあった。大学時代、『夜と霧』と出会う。収容所を撮った写真は強烈だったが、文章は遠かった。新聞記者となり、母となり、歳月を経て再び本書と出会う。

「……後世の若い読み手だった私にとって、この本は、くり返し読んでいくなかで、書かれていることに気づく、触れていく、もっと奥まで手が届くようになる、そういう本だった」 （後藤正治による書評より）

